HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	水田酪農に対する一つの問題点
Author(s)	渡辺, 以智四郎
Citation	季刊農業経営研究, 4, 7-8
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36273
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_7-8.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

・研究手帳・

経済原則と経済法則

平野　蕃

社会が社会として存続するために，まもらなければならない原則というものが，あるであう。いわば，超歴史的な法則性であり，そのような原則が，特定の歴史的社会でとる形態規定を法則といつて，両者を区別する人がある。宇野弘蔵教授の経済原則と経済法則の使い分けなど，そのよき例である。

最近，わたくしの目にとまつた山本二三丸，置塩信雄両教授の再生産論の新著も，そのよき例である。両氏とも，社会が社会として存続するための生産の一般性と，その一般原則が，特定の歴史的社会でとる特殊歴史的法則をはつきり区別して論じておられる。

このことを，この数年間，わたくしが関心をもち続けてきた，農業における商品生産と自給生産の問題にあてはめてみれば，商品生産も自給生産も，ともに，それが生産である以上ともに支配される共通性（一般的原則）と差別性（特殊法則）というものが，考えられる。商品生産と自給生産とが，一個同一の農業経営内に並存しているメカニズムは，どのようなものであろうか。

商品生産の経済法則と自給生産の経済法則とは，どの点で共通の地盤にたち，どの点で形態・機能をわかつのであろうか。

自給生産と商品生産とは，差別性のみの上にたつ，水と油・木に竹をついだような関係にあるのであろうか。

自給生産の経済法則と商品生産の経済法則の共通性については，マルクスがロビンソン物語のうちで，明快に指摘している。

貨幣も商品交換もない完全な自給自足のロビンソン経済のうちに「価値のいつさいの本質的な諸規定が含まれている」といつている。

自給生産といえば，なにか，主観的な恣意のチョウリョウする場ででもあつて，経済的な法則性がないような文章にぶつかつて，目をみはることがある。

自給生産と商品生産とが，並存している小農経済の歴史的な性格を論ずる段になれば，特定の経済（たとえば，日本の資本主義経済）の，さらにまた特定の段階規定として論じなければならない。日本の農業の商品生産が英米の商業的農業のように自生的にスムースにのびない理由については，自給生産の基体性といつた観点からでなく，日本の資本主義経済と農業との関連を，資本主義発展の特質からみなければならないであろう。けだし，アクテイヴな側面は商品経済・資本主義の面であり，パシイヴな防衛の立場は自然経済・自給経済の側だからである。

かりに，自給生産の存在が基盤的な強靭性を示すとしても，それは，自給生産の基体性といつたアン・ヂツヒな観点からでなく，日本の資本主義自体が，自給生産を残存せしめているメカニズムとしてみるべきではなかろうか。長期的にみれば，日本の農業も，自給的な雑穀作がおとろえ，草肥農業が解体し，馬産から酪農へと移行せんとして，商品生産が進展する方向にあるのではなかろうか。

（東北大学教授）

水田酪農に對する一つの問題点

渡辺以智四郎

水田酪農と一口にいうもその使い方が稍明確を欠くように思われる。水田を主体とするか飼料畑を別に有して家畜を飼育している経営形態もあり，水田だけで家畜を飼つている場合も水田酪農と称しているようである。然し「水田酪農」と銘をうつ以上は水田専営で家畜（主として乳牛）を入れてるものを指称することが妥当であると思う。斯う限定して酪農問題を考えて見たい。水田専営で家畜を飼うということになると飼料作物を栽培する面積を必要となる。それで水田の一部を畑に還元して飼料作物を作付けることになる。この場合永久に畑地として利用する場合と，2，3年位で又水田に転換する場合とがある。後者の場合はこれを田畑輪換或は田畑輪作などといわれている。そこで問題となるのは後者の場合である。戦前に永山の農業試験場で附近の農家に移嘱して田畑輪換の経営試験を行

つていた。

即ちこの経営の目的は経営の多角化（水田単作に対し）を図り，収入と地力の増進を目標とするというのである。その形式の多くは畑に還元した場合は牧草を作付けているようである。即ち水田を畑にすると水田に生育する雑草が根絶する。それであとで水田にすると除草労力が節減出来る。又牧草を作付けることによりこれを鋤き込んで緑肥にもなるであろうし，牧草は深根性のものであるから次期作付の水稲の生育もよくなる。それに家畜が導入されると牛乳による収入増と堆肥増産となるという利点があるといわれている。永山での試験は戦後は中止したのであるがその後各処に田畑輪作が行われているが，その進展の度合が低いのはどうしたわけなのか。この阻んでいる原因の重大なものとして地形の点を指摘したい。何故ならば水田を畑にする場合に最も大切なことは水を切つたときに完全に乾燥するということである。ところが斯ういう好条件のところが極めて少い。特に泥炭地の水田では恐らく水を切ることは不可能といわねばならぬ。泥炭地というのは水を母体として水生植物の堆積して出来たものであるから一度水田にすると一少部分を畑にすることはむづかしく常に滲透して湿地となる。それで泥炭地を水田にするとしけてくるから，どうしても隣接地は水田にしなければならぬのである。それで湿地には牧草が一番よいであろう。

以上は泥炭地の場合であるが，普通のところでも排水が可能なところはそう多くない。それに灌漑方法が殆んど掛け流しであるから配水方法を完全にしないと畑に還元することはむづかしい。又重粘土地では水田から畑にすると団粒組織が出来て2～3年は畑作は不向である。

斯うした土壌及び地形条件というものが水田酪農の普及を阻んでいる一つの重大な理由であると思われる。

（北海道農業研究所長）

北海道畑輪作についての反省課題

鉢呂繁雄

北海道における畑作輪作論議は多分に慣習的な技術方向是認の上に立つてなされているように思われる。そこに新たな農業生産の動向と千背する矛盾が，技術課題として新に登場している。

元来，従来北海道の輪作，或は『農産物市価の変動は農業経営を投機的となし，甚だしく不安定ならしめた。依て農業経営を改組し，可及的交換経済を縮少し，自給自足の範囲を拡大することによつて，農業経営を安定ならしむる必要を生じた』といつた欧州大戦後の経済恐慌，企業性農業の崩壊傾向後の北海道農業合理化気運中に萌芽した技術方向である。それは企業性からの回避，自給化拡大意識を基礎とし，所謂経営の有畜多角化への技術手段であつた。この具体的な構成は次のようなものであつた。

第一は連作傾向（商品化物体内の）による地力減退防止と，その維持向上をねらいとする休閑，緑作の登用，多収穫技術等ねらう前後作系列の技術的構成であり，

第二は自営畜耕手刈を前提とした，自家労力の農期均等配分，或は食料，飼料の自給拡大等をねらいとする多作田採用とその配列。

第三は災実減収，価格変動等に対する危険分散的多作田，品種の配列等であつた。これは当時の農家事情に応えて，技術的に許容され，合理化運動の推進と相俟つて順調な進展をみせつつあつた。

而し戦時の作付統制，戦後の農産物買価格商品化の農業ブーム，この時代は進展の萌芽はつみとられ，退潮を示した。而しこの間，少肥栽培，連作傾向による地力衰退，ブーム後の生産経済面の価格シエレー傾向，引き続いた冷害減収等は農家の生産経済を危胎に陥し入れた。この事態は寒地農業確立運動の展開と共に，前記欧州大戦後の事情と全く軌を一にする景観を呈しつつある。このことは畜耕手刈の自営農家という現実に妥協し，安全作の選定，地力の恢復という一連の客観的技術要請を単純に解詳するなれば，当時の技術方向その儘を受け入れる可能性があるかに見える。従つて輪作方式が当時の姿のまま，オーソドツクスなものとして技術者の問題意識にとらえられたことも故なしとしない。